

棄てられているのをみて瓜の皮を思い出しウリッパの意味をさとつたが佐藤氏もかく推定されていることが愉快であつた。それはゲイロッパの方言をみてもうなづけることである。(このことは必ずしも他處のウリュウの方言を湿つた地に生える草を意味することに反対するものではない)。軽井沢で育つた娘が「キュウリなれスイカなれ」と五六度くりかえしながらワレモコウの葉を手にとつてたき私の鼻先にもつてきて「キュウリの匂がする? スイカの匂がする?」ときいたことがあつたが、彼女によればキュウリの匂だそうで、もし「スイカなれキュウリなれ」といえばスイカの匂がするそうだ。佐藤氏の本にウリッパの項に「ギボウシとワレモコウを言う。ギボウシは葉がウリに似ているので言う、若い葉柄を煮て食べる。ワレモコウは葉の香がキュウリに似ているので言う」と記されている。この書をよむといろいろの草木で子供の生活にふれることもできる。このような書物が日本の各地からぞくぞくと出現することを待ちのぞむ。最後に学問的にも教育的にも大切ではあるが特殊的なものと世間からみられるこのような書物を出版された北佐久教育会に敬意を表する。(昭和 25 年 1 月北佐久教育会発行、発行所岩村田町 岩村田活版所、164 頁、定価 80 円)

○ 泰西の肉桂 (Cassia) と古代日本の桂 (Katsura) との連關に就て (藤田安二\*) Yasuji FUJITA: The relation between the name Cassia in the West and Katsura in the ancient Japan.

泰西に於ける肉桂 (Cassia) の語原は Greek の Kasia, Hebrew の Qesia を経て Assyria の Kasiya, Kasu にさかのぼる。<sup>1)</sup>

古代に於ける Cassia は肉桂の総称であつて, *Cinnamomum Tamala* Nees, *Cinnamomum Cassia* Bl., *Cinnamomum zeylanicum* Breyn., *Cinnamomum obtusifolium* Nees, *Cinnamomum iners* Reinw. 等近似種すべてを含み、たゞ上品下品等の区別があつたに過ぎない。このうち恐らく *Cinnamomum Tamala* Nees が最も早く知られ、<sup>2)</sup> 交通交易が進むにしたがい *Cinnamomum zeylanicum* Breyn., *Cinnamomum Cassia* Bl. に及んで品位も向上し、区別も明瞭になつたのである。

*Cinnamomum Tamala* Nees, *Cinnamomum obtusifolium* Nees 等の印度に於ける産地は Indus から Bhotan に及ぶ Himalaya 地方, Sikkim, Assam, Silhet, Khasia Hills 等であつて、この地方のものが先づ利用された事は間違ない。

然して上記 5 種の近似種の分布から見ると Assam 地方及び支那雲南省方面が分布の

\* 通産省大阪工業試験所精油研究室

1) Laufer: Sino-Iranica (1919) 542.

2) 著者は Aryan の印度侵入と共に肉桂の利用交易が始つたものと考へる。

中心をなす様に見えるのである。<sup>3)</sup> このうち Assam 地方の Khasia 山地は肉桂の産地として特に有名であつて、著者は肉桂 *Cassia* の語原はこの地の Mongoloid 民族 Kasia (Khasi) 又は Cis-Tibetan-Himalaya に住する古民族 Khasya に関係があるものと考えられるものである。<sup>4)</sup> 即ち採取に従事した民族名 Kasia 又は Khasya にその名称の由来を歸するものである。

この点に関して A.D. 63 年頃の作と傳へられる *Periplus*<sup>5)</sup> にあるマラバトロン (Tamala の葉) の取引状態の記事は重要である。こゝにはティスの境に於けるペーサタイ族とのマラバトロンの物々交換の一形式を示すが、ペーサタイとは今日の Assam 地方 Silhet 山地の民族又は Sikkim 地方の民族にあてられている。即ち正しく Kasia (Khasi) 或は Khasya 民族に相当するのである。

さて著者は前報<sup>6)</sup>に於て述べた様に古事記上巻の日子穗々手見命の物語の香木 (カツラ) は桂であつて肉桂なるべき事を主張する。即ち Katsura の語幹は明かに Katsu であつて、この Katsu は Assyria の Kasu に連るものと考えられるのである。この連関は古代に於ける文化と民族との移動によるものであつて、我文化も民族も当然メソポタミヤ乃至印度文化の影響を受けているものと信ずる。<sup>7)</sup>

古事記神話を天孫民族の日本移住以前に於けるその住地に於ける歴史の民族的記憶となし、その地域を世界最古の文化の発生地メソポタミヤの領域にうつさんとする考へは石川三四郎氏<sup>8)</sup>等によつても既に試みられたが、この考へは正しいと著者は考へる。

古事記は天若日子の門なるカツラには楓をあてるが、これは楓香脂 (*Styrax liquidus*) の原木、小亞細亞産の *Liquidambar orientale* Mill. であつて、この混同はまたこの物語が小亞細亞南部を中心とする舞台であつた事を示す片鱗ともなり得るのである。

(24. 8. 15)

3) Hooker: *Flora of Brit. India* 5 (1890) 128; Watt: *Comm. Prod. India* (1908) 310; Kirtikar, Basu: *Indian Medical Plants* 2 (1918) 1098; Liou: *Lauracées de Chine et D'Indochine* (1934) 41.

4) この兩族中 Khasya 族は最も古く、この古族と Khasia 族とはよし直接の關係は無くとも、近似なる名稱と所在を有する事のみよりしても何等かの因縁を有するものなる事は間違ない。

5) 村川譯: エリユトラ海案内記 昭和 21 年, 125, 249.

6) 藤田: 臺灣博物學會報 34 (昭和 19 年), 350.

7) Laufer によつて述べられる様に Muss-Arnolt はエヂプトの肉桂は Khisit と稱され Punt 國から輸入され又 Punt 國へは日本から輸入されたと考へ、Khisit は桂枝 (Keisi) より起ると考へるが、これは勿論全くの誤りである。著者はこの Khisit もまた當然印度の Kasia, Khasi に連關するものと考えられるのである。

8) 石川: 古事記神話の新研究 昭和 8 年